

室戸半島南部の室戸層より大型脊椎動物化石の発見

酒井 治 孝*・長谷川 善 和**

(1980年4月5日受理)

四万十帯南帯の室戸層から大型脊椎動物の化石が産出した。古生物学的検討がまだ充分なされていないが、四万十帯の堆積環境を考える上で重要な意義をもつので、とりあえず簡単に報告する。

地質の概略と産状

化石産出地点は高知県室戸市菜生港の北 20 m の地点である (Fig. 1)。この地域は甲藤・平 (1978) によれば室戸層のシアー相に属し、泥岩を主とするスランプ層から成る。主体をなす泥岩中には砂岩ブーディン及び泥灰質団球がひんぱんに含まれる。この地層には最大 10 m 大の砂岩のスランプ塊が含まれていることもある。スランプ塊の 1 つには、フジツボ破片よりなる厚さ 2~15 cm の化石層を 8 枚以上挟むものもある。

脊椎動物化石はフジツボ化石層産出地点の北北西約 100 m の海食台上的転石中から発見された。産出層は黒色塊状の砂質泥岩中の厚さ 15 cm の細粒砂岩層である。この砂岩層には炭化植物片、白雲母片を多量に含む平行葉理が認められる。化石の上側では葉理は骨の外形に沿って形成されている。一方、下側では葉理は骨の沈積によって切られている。砂質泥岩中にはフジツボ化石が散在している部分もあり、本来上述のフジツボ化石層と一連の地層であったと考えられる。恐らくこの転石は菜生港改修の際に掘削されたものであろう。フジツボ化石層中からは後期漸新世~前期中新世を示す貝化石が産出しており、脊椎動物化石の時代についても、これと同時代と考えて差しつかえないと考えられる。

標本について

この標本は黒色を呈し、形態は哺乳類の大腿骨のよ

* 酒井 治孝 九州大学理学部地質学教室

**長谷川善和 横浜国立大学教育学部地学教室

うな特徴が伺われるが、不完全であって、現在のところ種類の同定ができていない。最大長 200 mm, 最大幅 200 mm で、関節部の最大径は 95 mm, その頸部における最大の厚さは 56 mm であるが、大部分が欠除している。骨質に緻密質がほとんど見られないことから、この化石骨は海生動物のものである可能性が高いが、鯨類のものではない。鱈脚類が可能だとすれば極めて巨大なものに属する。しかし鱈脚類として考えるには別に問題があり、今後検討の上改めて報告する。

引用文献

甲藤次郎・平朝彦, 1978: 室戸半島層群の岩相と堆積環境 地質ニュース, (287); 21-31.



第1図 化石産出地点付近の地図
本図は国土地理院発行の5万分の1「室戸岬」の一部を用いたものである。

Explauation of Plate 35

図版— I . 1 — a , b : 産出化石骨

2 : 化石骨の産状

**Discovery of a vertebrate fossil from the Muroto Formation of
the southern part of the Muroto Peninsula**

Harutaka SAKAI

Department of Geology, Faculty of Science,
Kyusyu University

and

Yoshikazu HASEGAWA

Department of Geology, Faculty of Education,
Yokohama National University

